

自閉症スペクトラムの青年の相互行為

—療育者からの極性疑問文に対する応答能力—

細田由利(神奈川大学) 亀井恵里子(神奈川大学) デビッド・アリン(神奈川大学)

1. はじめに

これまでの研究で相互行為的な視点から自閉症スペクトラムの人のコミュニケーションを検証することの重要性が立証されている。Maynard (2005) は自閉症の人に向けられた質問のデザインの検証を通して自閉症の人の視点を理解することの必要性を強調した。Dickerson, Rae, Stribling, and Dautenhahn (2005, p. 36) は自閉症の子供の具体的な発話を検証することは、療育者が自閉症の子供が積極的に参加できるような相互行為をデザインする際の支援となるとしている。また、Ramey and Ray (2015) は療育者側からの分析を行って療育者が自閉症の子供と会話を共同構築する際に駆使する相互行為的資源の分析の必要性を示している (Ramey & Ray, 2015)。これらの研究は療育者の質問のデザイン、自閉症の子供の応答、相互行為の進行性の相互関係を検証することの重要性を論じている。

自閉症を持つ人のコミュニケーションの特徴の一つに、エコラリアがあり、自閉症を持つ人はよく他人の直前の発話を繰り返したり (即時エコラリア) 自分が以前に発話したことを繰り返したり (遅延エコラリア) する。近年多くの会話分析の手法を用いた研究が即時エコラリアと遅延エコラリアを検証しており (e.g., Gails & Knoetz, 2008; Stribling, Rae, & Dickerson, 2007; Local & Wootton, 1995; Sterponi & Shankey, 2014; Tarplee & Barrow, 1999; Wootton, 1999)、エコラリアが意味のない単なる繰り返しでなく相互行為上意味のある発話であることを立証している。しかしながら現在までに、著者が知る限りでは、日本語会話におけるエコラリアを会話分析の手法を用いて観察した研究はほとんど見当たらない。日本語は英語と文構造が大きく異なるため、エコラリア、特に他者の直前の発話の繰り返しを見る際に、英語での研究結果をそのまま参照するのではなく、日本語の文構造を考慮して検証する必要がある。

日本語は動詞や形容詞などの述部が文や句で構成された順番構成単位 (TCU) の最後に来る言語であるが、さらにその後助詞などの細かい文法的要素が付け加えられ、疑問、引用、否定などが表される (e.g., Hayashi, 2003; Tanaka, 1999)。例えば極性疑問文は英語ではたいていの場合 TCU の開始部分で文法上明らかであるが、日本語では例 (1) に見られるように TCU の最後の部分に「か」や「の」などの助詞が加えられることによって明らかになる。

(0) [作例]

ケンちゃんは今おうちにいるの？

上記例では発話順番の最後の「の」および上昇イントネーションによって疑問文であることが示されている。このような極性疑問文に対しての無標の応答は「はい (うん)」、「いいえ (ううん)」であるが、質問の述部の部分を繰り返して「いる」(またはその逆の意である「いない」) と言うことも可能である。今回のデータでは、自閉症を持つ青年、天、が極性疑問文に対して通常後者、つまり質問の述部の部分の繰り返しによって返答している様子が観察された。これらの繰り返しは他者の直前の発話の単なる繰り返しのようにも見えるが、述部の後にくる助詞を除いたりイントネーションを変えたりなどの操作が巧みにされていることがわかった。

本研究では自閉症を持つ青年が母親からの極性の質問にどのように返答するかを探究し、一見すると母親の質問の一部の単なるオウム返しのように見える応答にはその青年の巧みな相互行為能力が顕われていることを示す。

2. データ

本研究で使用したデータは合計約 230 分の 17 歳の自閉症を持つ青年「天」とその母親の自然発生的な会話である。会話は主に居間にて母親自身によって 46 回録音録画されたものである。母親はこれらの会話を録画する前に、本研究の目的への理解を示し、参加に同意した。

3. 分析

分析の結果、母親は天に質問にする際に、多くの場合極性疑問文を使用して質問をしていることがわかった。極性の質問に対しては通常「はい(うん)」と「いいえ(ううん)」がタイプに合った応答とされる(Raymond, 2003)。それに対し、今回検証されたデータでは、天は母親の極性の質問に対して、母親の質問の一部を繰り返すか、決まり文句の応答を行っていることが観察された。この研究では、前者の質問の一部を繰り返す応答に焦点を当てる。しかしながら、天の応答は母親の質問の一部をそのまま繰り返したのではなく、終助詞を除いたり、語形を変化させたり、プロソディーを変えたりしたものであった。下記に例を挙げる。

(1) [ねこ公園]

01->母: あつ、ねこ公園ってあるの?

02=>天: あ- ある.

03->母: ねこ? (.) ねこ公園;

04=>天: ねこ公園.

05 母: ふ::ん ↑えっ ↑どこにあるの?

06 (3.0)

07->母: ねんきんどうさんの近く::?

08=>天: 近く.

09 母: ふ::ん (1.8) はじめて聞いた ねこ公園. ふ::ん そうなんだ

10 (2.0)

11->母: すべり台とかある::?

12 (.)

13=>天: ある.

この断片の前に、天は母親にその日にねこ公園に行ったことを伝えた。それに対し、1行目で母親は「あつ」と言って驚きを示し、「ねこ公園ってあるの?」と言って確認要求をする。それに対し天は「うん(はい)」という無標の答でなく「ある。」と母親の質問の最後の述部の部分を繰り返して応答する。この「ある。」という答は母親の質問の繰り返しではあるが、母親の質問の最後の述部の部分「あるの?」から「の」という助詞を除き、上昇イントネーションを下降イントネーションに変化させたものである。すると母親は3行目で確認要求を繰り返すことによりさらに驚きを示す。天が「ねこ公園。」と公園の名前を再び言って確認すると、母親は「ふ::ん」と発して情報を受け止める。1.8秒の間の後、母親は「えっ」に続いて補足質問をする。Hayashi (2009)によれば、「えっ」は驚きが表されている会話環境でその前の順番で伝えられた予想外の情報を受け取ったことを示す。よってここで母親は再び驚きを示しているのである。補足質問をするにあたり、母親はここでは「どこ」という疑問詞を使用した質問形式を使用する。しかしながら6行目の沈黙で見られるように、今回検証したデータ内では、疑問詞を使った質問に対しての返答は天にとって困難であるようであった。母親は沈黙に続いて7行目で、5行目の自らの質問をデザインし直して、極性疑問文に変え「ねんきんどうさんの近く::?」と答の候補を含む確認要求の質問をする。すると天は母親の質問の最後の述部の部分の繰り返しではあるものの最後の音「く::」の延びを短くしてイントネーションも下降イントネーションに変化させて「近く。」と応答する。9行目で母親がこの情報を受け止めてこの連鎖は終了可能な点に達する。しかし母親は2秒の沈黙の後、再びこの話題に関する質問を行う。ここでも母親は「すべり台とかある::?」と極性の質問で確認要求を行い、それに対して天は「ある。」と再び質問の最後の述部の部分をプロソディーを変えた形で繰り返して応答する。

母親が質問して応答を得ることに成功した質問(1行目、3行目、7行目、11行目)は全て答の候補を質問に含んだ確認要求の形を取っていることに注目してほしい。これらは極性の質問であることから、「うん(はい)」「ううん(いいえ)」という答えが無標ではあるが、質問文の最後に位置する述部の部分を繰り返して答えることも可能であり、天の返答はすべて後者の形をとっている(2行目、4行目、8行目、13行目)。質問を確認要求の形にデザインすることにより、母親は天から応答を得やすくしていると言えるだろう。また、天は母親の質問の述部の部分をそのまま繰り返すのではなく、最後の助詞を除いたりプロソディーを変化させたりなどしている。ここから、天は質問の理解をしているだけでなく、返答というものはいかかにして形づけられるべきかを把握していることがわかる。このことは下の例(2)で見られるように、質問が否定疑問文の形を取っていても上記と同じことが観察される。

(2) [寒くない]

01 母: 天ちゃん、寒くな.:い?

02 天: 寒くない.

母親は1行目で「天ちゃん、寒くな.:い?」と天が寒くないかどうか否定の極性疑問文で質問する。その質問に天は「寒くない。」と母親の質問の述部の部分をそのまま否定形で繰り返して返答する。この例だけを見ると、天は質問の述部の部分が肯定形であろうか否定形であろうか、そのまま繰り返して返答しているかのようにも思える。しかしながら次の例(3)では、天は肯定の極性質問に否定の返答をしている。

(3) [疲れてない]

01 母: 天ちゃん ちょっと疲れた.:?:

02 天: 疲れてない.

2行目で天は母親の質問「天ちゃんちょっと疲れた.:?:」に対してこれまで観察してきた例と同様に述部を繰り返す形で返答してはいるが、この例では述部の極性を変えて「疲れてない。」と言っている。つまり天は母親の質問に含まれた述語を使用してはいるものの、その極性を肯定から否定に変化させることで返答を組み立てている。ここからわかるように、天は質問に応答する際に質問の最後に位置する述部の部分をただ自動的に繰り返すのではなく、答として適切である形に変化させて返答しているのである。

ここまでは天が極性の質問に答える際に質問の最後の部分を繰り返す例を紹介してきた。しかしながら、次の例(4)で見られるように天は時として返答に繰り返しを用いずに決まり文句を用いることもある。この抜粋では母親が天にその日に学校でやったことを尋ねている。

(4) [ランチのレシピ]

01 母: う.:ん(1.0) 給食の:(0.5) レシピ紹介を読む.:?:

02 検索 [したの]

03 天: [がんばった]

1行目で母親は「給食の:(0.5) レシピ紹介を読む.:?:」と語尾を上げて発し、ここでこの順番は完結可能な点に至る。しかしながら母親はすぐに「検索したの」と発話を再開する。これは「読む」から「検索した」への自己修復と考えられる。母親がまだ自己修復を行っている間に天は返答を始める。このタイミングでの返答は母親の1行目の発話への受け答えとも2行目の初めの部分「検索」への受け答えともとることが可能であるが、天の受け答えのペースを考慮すると、前者であろう。ここでの天の返答は他の例に見られるような質問の一部の繰り返しではなく「がんばった」という決まり文句である。しかしながらもしここで天が1行目の母親の質問の最後の述部の部分を繰り返すと「読む」という妥当な答とは言えないものになってしまうことを考慮すると、このような決まり文句を使用して返答したことも納得がいく。この例から天はただ自動的に質問の一部を繰り返して返答しているのではなく、質問を随時精査し、質問文の最後の部分の繰り返しが適切な返答となりえるのかどうか判断していることがわかる。もし繰り返しによる返答が可能でないと判断した場合には、決まり文句を答として発するのである。

4. おわりに

本研究では自閉症を持つ青年「天」とその母親の相互行為を分析した。その相互行為の中で、天は母親の極性の質問に対して、質問の最後の述部の部分を繰り返す形で返答することが多いことがわかった。この繰り返しは質問の述部の部分のそのままの繰り返しでなく文法的にもプロソディ的にも返答として適切な形に変換されたものであることが判明した。さらに、質問の述部の部分の繰り返しが返答として適切でない場合には、繰り返しでなく決まり文句を答として発する行為も観察された。このような天の返答の仕方は、天のある一定の相互行為能力を示していると言えるだろう。このように、本研究では自閉症を持つ人の質問への返答を詳細にわたって検証することにより、その人の持つ相互行為能力を明らかにすることができることを示した。一方、今回のデータ内では母親が天の返答をスムーズに引き出すように質問をデ

デザインしていることも観察できた。母親は多くの場合、質問を答の候補を質問文の最後に含んだ極性疑問文の形にして、天が自分の質問の一部を繰り返すことで容易に返答できるようにデザインしていた。母親はおそらく、息子との長年の相互行為の中で、いかなる質問のデザインが相互行為の進行を促進するのか、自然に理解しているのであろう。よって、本研究により療育者による自閉症を持つ人への質問のデザインの重要性ということも示された。

参考文献

- Dickerson, P., Rae, J., Stribling, P., & Dautenhahn, K. (2005). Autistic children's co-ordination of gaze and talk: Re-examining the 'asocial' autistic. In K. Richards & P. Seedhouse (Eds.), *Applying conversation analysis* (pp. 19-37). Basingstoke: Palgrave.
- Geils, C., & Knoetze, J. (2008). Conversations with Barney: A conversation analysis of interactions with a child with autism. *South African Journal of Psychology*, 38(1), 200-224.
- Hayashi, M. (2009). Making a 'noticing of departure' in talk in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41(10), 2100-2129.
- Local, J., & Wootton, A. J. (1995). Interactional and phonetic aspects of immediate echolalia in autism: A case study. *Clinical Linguistics & Phonetics*, 9(2), 155-194.
- Maynard, D. (2005). Social actions, gestalt coherence, and designations of disability: Lessons from and about autism. *Social Problems*, 52(4), 499-524.
- Ramey, M., & Rae, J. (2015). Parents' resources for facilitating the activities of children with autism. In M. O'Reilly & J. N. Lester (Eds.), *The Palgrave handbook of child mental health* (pp. 459-479). UK: Palgrave Macmillan.
- Raymond, G. (2003). Grammar and social organization: Yes/No interrogatives and the structure of responding. *American Sociological Review*, 68(6), 939-967.
- Sterponi, L., & Shankey, J. (2014). Rethinking echolalia: repetition as interactional resource in the communication of a child with autism. *Journal of Child Language*, 41(2), 275-304.
- Stribling, P., Rae, J., & Dickerson, P. (2007). Two forms of spoken repetition in a girl with autism. *Interactional Journal of Language and Communication Disorders*, 42(4), 427-444.
- Tanaka, H. (1999). *Turn-taking in Japanese conversation: A study in grammar and interaction*. Amsterdam/Philadelphia, PA: John Benjamins.
- Tarplee, C., & Barrow, E. (1999). Delayed echoing as an interactional resource: A case study of a three year old child on the autistic spectrum. *Clinical Linguistics and Phonetics*, 13, 449-482.
- Wootton, A. J. (1999). Delayed echoing in a child with autism. *First Language*, 19, 359-381.